

宇治の文化的景観における白川の茶業と家屋

はじめに 文化遺産部景観研究室では、京都府宇治市からの受託調査研究として2009年度から2010年度にかけて、「宇治の文化的景観」における伝統的家屋調査を実施した。2009年度は都市域の中宇治地区（『紀要2010』参照）を、2010年度は茶農村集落である白川地区を対象に家屋調査を実施した。

本稿では、白川地区の家屋と集落構造の関係、家屋と茶業の関係に焦点を当て、伝統家屋からみた白川地区的文化的景観の特徴について報告する。

白川の地形 白川地区は、平等院より南東1.5km、白川が流れる南北に細長い小盆地の谷地に位置する。谷地は、長さ南北約1km、谷幅東西200～400m、谷底の標高約50m、山丘は標高約100mで、白川が南から北へ貫流し、白川の東側に寺川が併流する。現在、白川は暗渠化しており主要道路である宇治市道白川浜山本線の地下を流れる。この白川を境に、西側は急な丘陵地で平地がわずかであるのに対し、東側では緩やかな河岸段丘が形成されており、緩急の差が大きな白川両岸に集落が形成されている。

集落の形成過程 白川地区では、康和4年（1102）に白川金色院が創建され、その後「白川十六坊」と呼ばれる中世寺院群に発展した。しかし、江戸中期までに、白川十六坊の多くの寺院は衰退し、近世以降、白川沿いに茶農村集落が形成され茶農村集落としての特色が強まり、明治始めの廃仏毀釈によって白川十六坊の全ての寺院が廃絶することとなる。明治中期の地籍図をもとに作成した明治中期土地利用復原図（図23）をみると、白川東側の白川十六坊の跡地は、北部は宅地、南部では水田や畠などの農地に転用されており、中世の寺院群を起源とする塊村集落と、近世茶農村集落に由来する街村集落の二種類の敷地割りが読み取れる。

屋敷構え 宇治茶の製造は、茶農家による荒茶と呼ばれる荒乾燥までの工程と、主として茶問屋による仕上げ茶と呼ばれる製造工程がある。白川地区的茶農家では、茶の生産から荒乾燥までの製茶行程をおこなっている。

茶農家の屋敷地は、主家と共に茶業関連施設が屋敷地内に配置されており、生活空間であると共に茶の生産空間である。白川十六坊跡に位置する屋敷地は、かつての

寺院跡を屋敷地に転用しており、石積みで造成された各屋敷地の外周を土塀で囲み、敷地奥に主家、敷地正面ないし側面に茶工場、長屋・蔵等の付属屋を配す。整然とした敷地割と塀で囲まれた閉鎖的な屋敷構えが特徴である。いっぽう、白川沿いの屋敷地では、道路に平行して間口を広く設け、敷地背後の傾斜面に石垣を築き、敷地を造成する。伝統的な家屋は、塀は設げずに生け垣や植栽などで緩やかに囲む開放的な屋敷構えである。

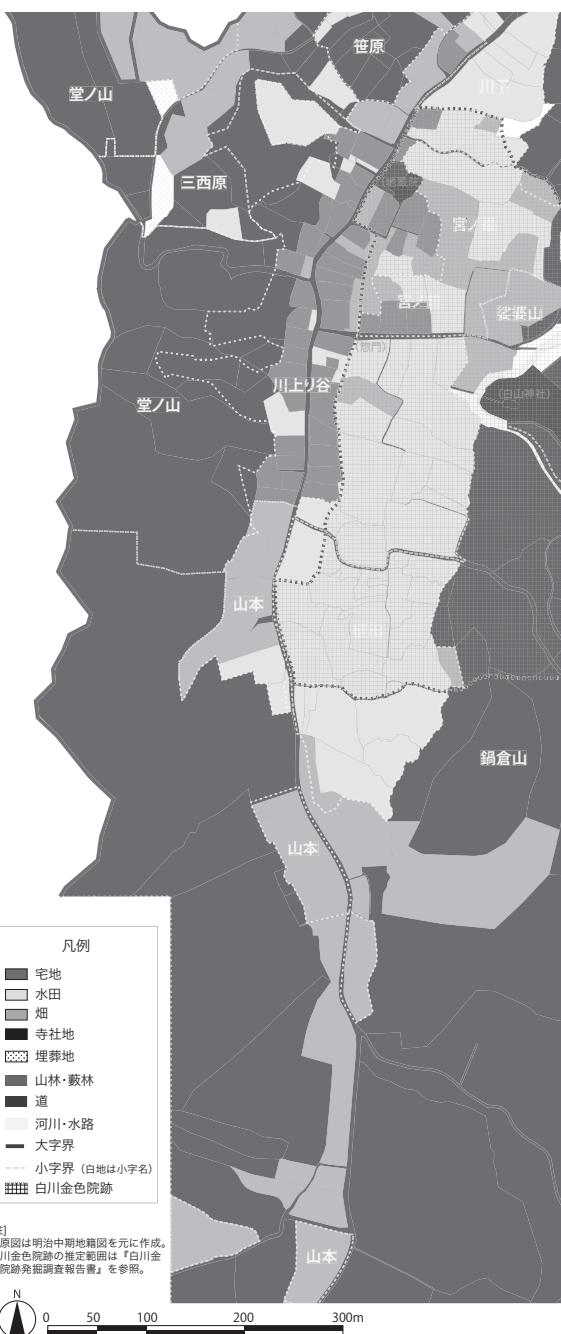


図23 白川地区明治中期土地利用復原図

表3 白川地区的茶工場調査物件一覧

No.	名称	建築年代		構造形式	建築形式				配置	所有	使用状況
		年代	根拠		建築規模	小屋組	横連子窓	越屋根			
1	H家旧茶工場	明治5年	御幣	木造、中2階、切妻造、棟瓦葺、平入	3間×2.5間	登り梁	有	無	敷地前面	個人	未使用
2	S家旧茶工場	大正頃か	推定	木造、中2階、切妻造、棟瓦葺、平入	2間×3間	合掌組	無	無	敷地前面	個人	未使用
3	Y家茶工場	昭和初期	推定	木造平屋、切妻造、棟瓦葺、妻入	3間×5間	和小屋	無	無	敷地奥	個人	未使用
4	U家茶工場	昭和25年	聞取り	木造平屋、切妻造、棟瓦葺、妻入	5間×12間	木トラス	無	有	敷地奥	個人	使用
5	旧白川共同茶工場	戦後か	推定	木造平屋、切妻造、棟瓦葺、平入	5間×10間	木トラス	無	有	屋敷地外	共同	未使用
6	H家茶工場	昭和37～38年	聞取り	鉄骨平屋、切妻造、波形スレート葺、平入	8m×13m	鉄骨トラス	無	無	屋敷地外	個人	使用

主家の特徴 白川地区の江戸期の民家建築として、天明3年（1783）の主屋が一棟現存する。建築形式は木造、入母屋造、茅葺、叉首組、平入、4間取りで、京都府南山城地域の典型的な近世農家建築である。明治以降に建てられた主家はいずれも瓦葺きで、4間取りの伝統的形式から大きく変わらず、近世の建築形式からの発展形態とみる。また、茶農家と一般農家の主家には建築形式の差は無く、茶工場に代表される茶業関連の付属家によって構成される屋敷構えに、茶農家の特徴が見出せる。

茶工場の特徴 白川集落内で確認できた茶工場は全15軒で、その内4軒は現在も稼働している。これら茶農家の生産活動に直結した茶工場は、茶業形態の変化に応じて、配置、建築形式に変遷が見られる（表3）。

手もみ製茶をおこなっていた明治期から大正期の茶工場は、通りに面して屋敷前面に配置され、切妻造、塗屋、1階建ないし2階建の長屋で、1階部分に排気用の横連子窓が切られる（図24）。明治後期から大正期にかけて、手もみ製茶から機械製茶への移行と共に、長さ12mに及ぶ耐火煉瓦窯茶炉を納めるべく茶工場が巨大化し、木造トラスを用いて、梁行5間、桁行10～12間程の大空間を作り、通風・採光のため、棟に越屋根の煙出しを設ける。屋敷内の茶工場の配置は、敷地前面から奥行き方向に変化する。機械製茶が本格化はじめた昭和初期以降

は、茶工場の共同化や自動車による搬出入のため、屋敷地外に独立して茶工場を建設するようになり、昭和30年代中頃には、鉄骨造の製茶工場もみられる。現在では、共同製茶工場は集落外に移転しており、茶工場の大部分は倉庫や住宅として用途転用されている。

家屋から見た文化的景観の特質 現在の白川地区の集落景観は、茶園と共に宇治茶の生産農家が集住し、茶農村集落としての集落構造と景観が今まで維持されている点が特徴である。特に、茶農家の屋敷地では、中世の白山十六坊と近世の茶農村集落の二段階の集落形成に由来する2パターンの敷地が存在し、住居と茶工場が一体となった伝統的な屋敷地形態が維持されており、茶工場に代表される各時代の茶業形態が生んだ建築と屋敷構えに宇治茶業の生業形態の変遷が顕著に表出されている。こうした白川地区の集落景観は、宇治地区と共に、宇治茶業の変遷と生産・加工・販売という一連の生業形態を理解する上で重要な文化的景観である。

（松本将一郎・清水重敦・恵谷浩子）

参考文献

- 宇治市教育委員会『白川金色院跡発掘調査報告書』2003。
- 京都府茶業会議所『京都府茶業百年史』1994。
- 京都府教育委員会『京都府の民家 調査報告第七冊—昭和48年度京都府民家緊急調査報告—』1975。



図24 明治期の茶工場（No.1 H家旧茶工場）



図25 茶畑が広がる白川地区的集落景観